

親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

親鸞聖人のご生涯(1)

藤谷知道



飢饉では、四、五の両月だけで京の街に四萬二千三百の餓死者がありました（鴨長明『方丈記』）。まさに「末法の世」の到来であり、人々は、地獄と化したこの世

末法の世

親鸞聖人の誕生は今から八四五年前。平安から鎌倉にかけて波瀾万丈の生涯を90歳まで送られました。その時代は、奈良、平安と続いた律令国家が機能不全に陥り、社会全体が大混乱に陥っていた時代です。天皇

日野家の業

を厭い、来世の極楽を願う（欣求浄土・厭離穢土）ほかありませんでした。聖人の父は日野有範と言

います。母は源氏の流れをくむ吉光女で、聖人が8歳の時、亡くなりました。日野家は、摂関家を独占する藤原北家の流れで、儒学や歌道によって朝廷に仕えていました。

父、有範は「皇太后宮大進、従五位下」と伝えられており、あまり出世していません。

有範の長兄、範綱（聖人の養父）は、後白河法皇に仕え、若狭の守に任ぜられ

ています。

有範の次兄、宗業は後白河法皇の第三皇子・以仁王の学問の師でした。以仁王は一一八〇年、平氏征討の令旨を出して源頼政とともに挙兵しましたが、宇治川の合戦に敗れ、平氏に殺されました。宗業はその首実

検をさせられています。晩年には従三位に叙せられ、文章博士や式部大輔を歴任しています。また、聖人の越後配流決定の直前には越後権介に任ぜられてもいます。

聖人の兄弟は全員、出家しています。そこには、お母さんが早く亡くなったことが関係しているそうです。当時は母系社会の名残もあり、聖人達はお母さんのもとで養育された可能性があります。源氏に連なるお母さんは平氏全盛のもとでは肩身が狭かっただろうし、そのお母さんが亡くなれば、

なおさら、子の養育が難しくなってしまうので、出家せざるを得なかったのかも知れません。

聖人の出家

聖人が出家するにあたって古来、言い伝えられてきた一つのエピソードがあります。聖人が伯父範綱に連れられて青蓮院に慈円を訪ねると、慈円が「今日はもう遅い、式は明日にしよう」と言われたので、即座に「明日ありと思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものは」と歌われたという話です。

こうしたエピソードからうかがえることは、幼くして仏を拝むという資質に、父の不遇、母の逝去という悲しみが重なり、その上、先にもふれたように「末法の世」を目の当たりにしたということもあって、9歳という幼さでしたが、幼きながらも聖人は「生死いづる道」を求めて出家されたのだと思います。

聖人の原体験

「原体験」という言葉があります。後々に、その人の思想や生き方を決定するようになる、幼子の魂に深

く刻み込まれた経験のことです。

人生の転機に立たされた時、聖人はいつも、厳しい道を選んでおられます。「名聞・利養・勝他」の心とたたかいつつ、それを振り払い、はるかに仏を仰ぎながら次の一步を踏み出していかれました。それこそ、三宝に帰依する真実信心（無我なる我）による大乘菩薩道であったと、私にはそのように思っています。

私にはそのように思っています。聖人にさせたものは、なによりも「真実」を求めてやまぬ菩提心であったでしょうし、同時に、聖人の原体験にうながされた一切衆生と共に助からんとする心（度衆生心）でなかったかと思えます。

第四回

親鸞聖人のご生涯(2)

藤谷知道

木村無相さん

藤谷純子

6月9日午後1時半〜

念仏生活を妙好人に学ぶ(4)

### 三味線ばあちゃん 学んだこと

藤谷純子

岡部はるさんは、明治23年に石川県内灘町うちなだに生まれまし

た。父親は猟師で、はるさんを傍らに「おつとめ」を欠かしませんでした。十七、八才の頃に大阪の芸者屋に身を寄せ、厳しい修行に耐えて芸を身につけ、エンタツやアチャコと舞台に立つほど有名になりました。しかし結婚を機に苦労が始まり、二度目の結婚相手は女道楽で、引き取って育てていた弟の娘に手を出したのです。

「同じ屋根の下で、われのおやじをわれの娘と取り合ひするのやさかい：」「今日こそは、今日こそはと、おやじを出刃包丁でひと思いに刺し殺そうと、何遍思うたものか。わてはその時、ああ、これがほんまの地獄やなあ、思いましたわ」。

こんな地獄の生活から脱け出したいと、真剣な仏法聴聞が始まったが、苦しみは増すばかり。とうとう「どつちか一人に決めてくれなはれ」とせまると、主人は娘の方を選んだのでした。

捨てられたはるさんは「これが迷いの元や」と髪をそり落とし、「この娑婆に当てるなるもんは一つもない。当てるなるもんはこのナンマンダブツ一つや」とわが身に言い聞かせて、親鸞聖人の二十四輩巡礼の旅に出ることにした。

「その時のわたのナンマンダブツは、こんなちっこいナンマンダブツやった」と。それが帰ってきたときは「こないな、ぼっかいのつかんなんなんまんだぶつになつた」と。両の手を広げられるだけ広げて見せたそうである。そして「鬼や畜生やと恨み憎んだわが子と主人こそ、わてを広い道に出してくれんがために、あの姿になってご催促してくれした仏さんやった」と、

二人に会って泣いて礼を言ったのだった。

こうして念仏に新しい自在な生活をいただいたはるさんは、お同行さん達から「三味線ばあちゃん」と呼ばれて親しまれた。名づけ親は盲目の念仏総長・暁鳥敏師あけがらすはやだった。

本山の財政が大赤字なのをラジオで聞いたはるさんは、吉崎御坊の蓮如忌で得たお金をもって本山の総長室で暁鳥先生に会い、請われるままに自作の「数え唄」を歌い、

#### ピンピンシャンシャン

##### 声張り上げて

##### 唄うまんまがお他力や

##### どこで死のうと倒れようと

##### そこがそのままお浄土や

##### と歌いしめた。

この唄の通りに生きた三味線ばあちゃんの最期は、内灘の髑髏庵どくろあんでひとりベッドに横たわって死んでいるのを見つげられ、その合掌した手には数珠が掛けられていたという。行年は84才、法名は釋妙常しゃくみょうじょうであった。

○三味線ばあちゃんの言葉

\* 人のことを、ああやこややいうこといらんのや。それよりわが身を見せてもらうことや。

\* 仏法いうもんはその日一日や。今日の一日が、うれしいこと、たのしいこと、さわやかなこと、きよらかなこと。そやさかい、死んで極楽へ行きたいとも思わな、よろこんで今日の一日受けて、苦しみがあってもその苦しみと一緒にいける道があるのや。そこが肝心や。

\* だいたいな、苦抜けしたい苦抜けしたいいうのは十九願の世界や。観經さんやな。それから極楽へ行きたい極楽へ行きたいいうのは二十願の阿弥陀經の世界や。十八願の大經さんの世界は、ああなりたいこうなりたいの世界と違うのや。どんな苦しみが来てもこたえんことになつとる。その苦しみの中からよろこびを見いだしていけるのや。

丸裸の娑ちゃんの一生を見せて下さり、有り難うございしました。合掌

### 聞法生活を振り返って 植山さよ子(中津)

勝福寺様で聞法させて頂くようになって20年近くになりますが、いまだに私は、光の中に生かされているとか、広い世界に出させて頂いたとかいう実感がなく、日々暗闇の中におります。

広い世界に出られないのは、私は私でよかったと心から喜べないので、人に対しても壁を作っている気がして苦しいのです。

12日の聞法会で、三味線ばあちゃんのお話を聞かせて頂いて、この世にこのような方が存在しておられたのかと感動し、三味線ばあちゃんは真の意味で幸福で浄土の人と思えました。

これからの人生はどうなるか分かりませんが、仏さまのなさることに相撲は取れないので、如来さまのなさしめたもうままだに、私なりの努力をさせて頂こうと思つていきます。私の人生に勝福寺様があって良かったです。いたらぬ私ですが、これからもよろしくお願い致します。